



僕とお嬢様と スキンケア



zen-aku

バス停

この通りに、三メートル離れて、バス停が二つある。

一つは星鉄のバス停。およそ十分間隔で、駅行きその他のバスが来る。もう一つは虹鉄のバス停。およそ三十分間隔で、市内を一周する循環バスが来る。

僕がいるのは、虹鉄のバス停。ベンチに座ってハンドクリームを塗っている。

「その手荒れ、痛いでしょう」

「え。はい」

声の方を向いた。隣にきれいな女の子が座っていて、僕を見ていた。大学生くらい？

「それ、ソフトの方でしょう。ベトベトする感じがいやだから？」

「そうなんです」

ずっと同じハンドクリームを使っている。〇〇〇ソフトだ。手に塗ったとき、サラサラしているので、ずっとこれだ。ソフトがつかない〇〇〇の方は手に塗ったとき、ベトベト感が気になって無意識で拭いてしまうからだ。

「そこまで酷くなったら、ソフトの方でなくて、〇〇〇の方がいいと思うよ。わたし、今持っているから、塗ってみなよ」

「え、でも……」

女の子は鞆から〇〇〇を取り出した。僕は塗ってみる。

おや？ 手の感じが……

「ほらね。こっちの方がいいでしょ」

「そうだね。今度から、ソフトじゃない方にするよ」

女の子がにこっと笑った。

「どれくらいソフトの方を使ってたの？」

「三年くらいかな」

今の食品加工工場に勤めて始めてからだ。毎日、手指のアルコール消毒の義務があって、ひと月くらいで指が赤くはれるようになった。

「長い間、サラサラタイプを使っていて、ベトベトタイプを使う準備ができていたのね」

「そういうモノなの？」

女の子がうん、とうなづいた。

「お味噌汁は好き？」

「何で？」

突然、お味噌汁の話になった。

「あのね、荒れた肌の再生のために、お味噌汁がいいんですって」

「そっか。知らなかった。知ってたら、もっと飲んでたのに」

これからは、意識して飲むようにしなくちゃ。

「ねえ、今から飲みに行こうよ。いいお店があるんだ」

「まるでお酒に誘うみたいだね」

女の子がちょっとしかめ面になった。言い過ぎたかな？

「お酒じゃないよ。定食屋さんなんだけど、お味噌汁だけでも注文できるんだよ。まったく、あなたって……。そうだ、呼び方を決めましょう」

「あ、僕は……」

女の子の手が僕を止めた。

「あなたは……、のび太くんに似てるから、“のっくん”ね」

「眼鏡もしてないし、小学生でもないけど」

女の子がパチンと僕の指をはじいた。痛てて……

「いいの。雰囲気だから。わたしの事は、そうね、“お嬢様”と呼んでね」

「はい。“お嬢様”」

僕は逆らわないことにした。

「バス来たわ」

「そうだね。行こう」

僕とお嬢様とスキンケア

<http://p.booklog.jp/book/124353>

著者 : zen-aku

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/zen-aku/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/124353>

電子書籍プラットフォーム : パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社トゥ・ディファクト